筑前琵琶

養和（ようわ）の飢饉（ききん） 疫病（えきびょう）

琵琶　川村旭芳

川村旭芳（かわむらきょくほう）

神戸市出身在住。八歳の頃、母の勧めで筑前琵琶日本旭会総師範 二代柴田旭堂師に入門。現在、筑前琵琶日本旭会 師範。門人会「筑前琵琶 川村旭芳会」主宰。古典曲を継承しながら新作の創作にも取り組み、阪神・淡路大震災の追悼曲はじめ、母 川村素子の作詞による作品も発表。ＮＨＫ-ＦＭ「邦楽のひととき」、ＢＳテレ東「おんがく交差点」他、テレビ・ラジオ出演。琵琶・胡弓・箏・尺八の演奏家四人で結成された和楽器ユニット「おとぎ」の代表を務め、本年七月に結成二十周年記念コンサートを大阪にて開催予定。朗読と琵琶語りを中心にした音楽劇も創作・上演している。ソロアルバムＣＤ『源平一ノ谷合戦』『川村旭芳作品集～母娘合作集～』、和楽器ユニット「おとぎ」ＣＤ『音戯紀行』他発表。

解説

養和の飢饉 疫病

鴨長明『方丈記』より原文抜粋／川村旭芳 作曲

「ゆく河の流れは絶えずして しかももとの水にあらず」の冒頭句で知られる『方丈記』は、日本随筆文学の代表作の一つで、鎌倉時代初期に書かれました。源平の争乱期を生きた著者の鴨長明は、晩年、京の郊外に一丈四方の庵を結んで隠棲し、そこでそれまでに見聞きした世間の様を書き記し、自ら『方丈記』と名付けました。

壇ノ浦の戦いから数ヶ月後に都周辺で起きた大地震の他、安元の大火、治承の辻風、養和の飢饉、更には福原遷都によって人々が混乱する様など、自らが経験した災厄について克明に記されていて、災害史の史料としても重んじられています。本作「養和の飢饉 疫病」は、二〇一五年に創作した「元暦の大地震」に続く、方丈記シリーズの第二作目として、コロナ禍における二〇二一年に創作いたしました。

長い歴史をさかのぼると、人類は幾度となく自然災害や疫病に見舞われてきました。

数えきれないほどの犠牲者を出し、どれほど打ちのめされても、そのたびに立ち上がってきた先人たちに思いを馳せ、尊い命を落とした方々と、今この瞬間も苦難の中にある人々に思いを寄せつつ、心を込めて演奏いたします。

（川村旭芳）

詞章

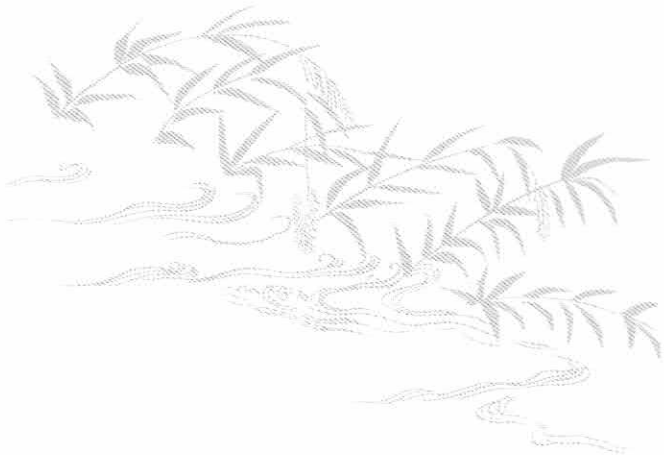
ゆく河の流れは絶えずして しかももとの水にあらず
よどみに浮ぶうたかたは かつ消えかつ結びて
久しくとゞまりたるためしなし
朝に死に 夕に生るゝならひ たゞ水の泡にぞ似たりける
不知 生れ死ぬる人 何方より来たりて 何方へか去る

養和のころとか 久しくなりて覚えず
二年が間 世の中飢渇して あさましきこと侍りき
或は春夏日照り 或は秋 大風 洪水など
よからぬことゞもうち続きて 五穀ことごとくならず

京のならひ 何わざにつけても みなもとは田舎をこそ頼めるに
絶えて上るものなければ さのみやは操もつくりあへむ
念じわびつゝ さまざまの財物 かたはしより捨つるがごとく
すれども 更に目見たつる人なし
乞食路のほとりに多く 憂へ悲しむ声 耳に満てり

明くる年は立ち直るべきかと思ふほどに
あまりさへ疫病うちそひて まさゞまにあとかたなし
世の人みな けいしぬれば 日を経つつ きはまりゆくさま
少水の魚のたとへにかなへり
築地のつら 道のほとりに 飢ゑ死ぬ者のたぐひ かずも知らず
いはむや河原などには 馬・車のゆきかふ道だにもなし

いとあはれなることも侍りき
さり難き妻をとこ持ちたるものは その思ひまさりて深きもの
必ず先立ちて死ぬ
その故は わが身は次にして 人をいたはしく思ふ間に
まれまれ得たる食物をも かれに譲るによりてなり
されば親子あるものは 定まれることにて 親ぞ先立ちける

また母の命つきたるを知らずして いとけなき子の
なほ乳を吸ひつゝ 臥せるなどもありけり

崇徳院の御位の時 長承のころとか
かゝるためしはありけりと聞けど その世のありさまは知らず
まのあたり めづらかなりしことなり